



**Data** 2023-61

監督・脚本：トマーシュ・ヴァイン  
レブ／ベトル・カズダ

原作：ロマン・ツィーレク『Ja, Olga Hepnarová』

出演：ミハリナ・オルシャニスカ／  
マリカ・ソポスカール／クラ  
ラ・メリーシコヴァー／マル  
チン・ペフラート／マルタ・  
マズレク

👁️👁️ みどころ

1973年7月10日、チェコのプラハで1台のトラックが歩行者の中に突っ込み大量の犠牲者が！これは過失ではなく、22歳の女性オルガ・ヘプナロヴァーの故意による“社会への復讐”だったが、それは一体なぜ？

少女の頃から自殺未遂や精神病院を体験し、“性的障害者”と自称するオルガは“ボブ”頭の美少女だが、その頭の中はどうなっているの？

日本でも、安倍晋三元総理銃撃事件や岸田総理襲撃事件が起きているが、両者とも被疑者の動機は不明。しかし、オルガの場合それは明白だから、2016年製作の本作が日本で初公開された今、その意味をしっかりと考えなければ！



■□■ 実話に基づく物語！なぜチェコ最後の女性死刑囚に？ ■□■

タイトルの通り自己紹介されても、日本人には“オルガ・ヘプナロヴァー”って一体誰？と思ってしまう。しかし、チェコでは「チェコスロバキア最後の女性死刑囚」として23歳で絞首刑に処された実在の人物“オルガ・ヘプナロヴァー”は有名らしい。

日本では、駆け落ち先の待合旅館での長時間の性行為の末、腰紐で男を締め殺した上、男性器を切り取り、3日間それを持ち歩いた挙句に逮捕された阿部定(事件)が有名だが、オルガ・ヘプナロヴァーはなぜ死刑にされたの？それは、1973年7月10日にプラハでトラックを歩行者の中に意識的に突っ込ませて、8名を殺害、12人を負傷させるという事件をひきおこしたためだ。

第2次世界大戦終了後のチェコは共産国ソ連の影響下にあったが、もちろん裁判は開かれたらしい。オルガは弁護人に対して心身喪失の主張をすることを厳禁した上、一貫して「自分の行為は、多くの人々から受けた虐待に対する復讐であり、社会に罰を与えたものだ」と主張し、1974年4月に望みどおりの死刑判決を受け、1975年3月に死刑が

執行されたそうだ。本作は、そんな“オルガ・ヘプナロヴァー”に焦点を当てた2016年製作の映画だ。

## ■□■裕福な家の子なのになぜ自殺を？なぜ精神科に？■□■

1951年生まれオルガの父親は銀行員、母親は歯科医、そして冒頭に映るオルガの家族が住んでいる家は立派なものだから、経済的には裕福な家庭だ。しかし、父親のDVと母親の事務的な愛情の中で育つうちに鬱になってしまったオルガは、13歳の時の1964年にメプロバメートという精神安定剤の過剰摂取によって自殺を図ったが未遂に終わり、精神病院に収容されることに。

精神病院といえば21世紀の今でも、その実態は闇に包まれており、病院の中で行われているであろう、さまざまな“人権侵害”が憂慮されているが、1973年当時のチェコにおける、その実態は酷かったらしい。そこでオルガがはじめて目にした同性同士のカップリングや未成年者の喫煙には、私たちもビックリ！さらに、当時のチェコの精神病院でも異質な存在として見られたオルガがシャワー室で受けた女たちだけによる集団リンチの姿はおぞましい限りだ。

刑務所という世界がいかに異様な世界であるかは、高倉健主演の『網走番外地』シリーズでも明らかだが、あれは男たちだけの刑務所内の世界だった。それに対して、まだ10歳代のオルガが受けた、精神病院における異様な世界は女ばかりのそれだから、余計に陰湿・・・？精神病院でそんな洗礼を受けたオルガが、退院後は家族からも距離を置くようになったのは当然。彼女の誕生日の願いは「家族から離れること」になってしまったらしい。

しかして、煩わしい親元を離れ、一人で暮らす森の中の質素な家具しかない小屋が、彼女の孤独の象徴となったらしい。そんなオルガが髪をボーイッシュなボブに切ったのは、世間への反抗の象徴だ。そして、何とオルガはガレージでのトラック運転手として働き始めたからすごい。チェコでは若い女性でも、そんな仕事が務まるの・・・？

## ■□■本作のオルガはすごい美女！対するホンモノは？■□■

1973年の大事件はウィキペディアで詳しく解説されているが、本作でチェコ・アカデミー（チェコ・ライオン）賞2017主演女優賞を受賞した女優ミハlina・オルシャニスカは、すごい美人。私は『マチルダ 禁断の愛』（17年）（『シネマ43』未掲載）、『ヒトラーと戦った22日間』（18年）（『シネマ42』126頁）、『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』（19年）（『シネマ47』192頁）でその顔をよく覚えている。彼女の“ボブ”というボーイッシュな髪型は、『レオン』（95年）でナタリー・ポートマン演ずるマチルダで有名になったが、元祖はどっち？もともと、ウィキペディアでオルガ・ヘプナロヴァーと調べてみると、そこに写っているボブカットの顔写真（似顔絵？）は、いかにも意思の強そうな顔立ちだが、とても美人と言えるものではないから、女優ミハlina・オルシャニスカとホンモノのオルガとの対比もしっかりと。

それはともかく、本作のオルガは、セリフをほとんど喋らない代わりに、タバコを吸うシーンがやけに目立つ。また、前述したように女ばかりの施設に入れられたオルガが、シャワー室で集団暴力を受けるシーンが登場するが、なぜ彼女がレズビアンになったのかは解説されない。したがって、トラック運転手として働くオルガが職場で知り合った美女イトカ（マリカ・ソポスカ）と同性愛に溺れる姿は興味深い、イトカには別の恋人がいたため、その密月関係が長く続かず、捨てられてしまったのは仕方ないだろう。

## ■□■社会への復讐の芽は“性的障害者”にあり？■□■

日本では、2022年7月8日に起きた安倍晋三元総理銃撃事件や、2023年4月15日に起きた岸田総理襲撃事件が起きているが、前者は被疑者の動機の1つが安倍元首相が支援していた旧統一教会への怨みだったこともあって、論点が多岐にわたっている上、後者は被疑者が黙秘を続けているため、動機を含めてその全貌は解明されていない。しかし、オルガ事件についてはオルガ自身が裁判ですべてを説明しているから、本作はそれに沿って映像を繋いでいくことになる。オルガ・ヘブナロヴァーが死刑判決を受けた罪は「1973年に、チェコの首都プラハの中心地で、路面電車を待つ群衆の間へトラックを故意に突っ込ませ、8人を死亡、12名を負傷させた」というものだが、なぜ彼女はそんな罪を犯したの？それについて、彼女は「無慈悲な社会のせい」だと語っているうえ、心神喪失や心神耗弱の主張を自ら拒否したから、本件犯行が彼女の社会に対する復讐心から出たことは明白だ。

また、彼女は自らを性的障害者と語っており、そのことによって社会的迫害を受けたことも明確に語っている。LGBTが市民権を獲得し(?)、日本でもその法案審議が佳境に入っている今なら、それを公表すれば誰かが助けてくれるはず。しかし、1960～70年代のチェコは「性的障害者」に対してそんな温かい目を向けなかったから、オルガがそんな社会への復讐を誓いながら、孤独な世界に入り込んでしまったのは仕方ない。したがって、彼女が性的障害者であったことが、社会への復讐の芽になったことも間違いはない。

2023（令和5）年5月19日記